

知求会ニュース

2018年05月

第66号

◎ 他大学院・博士号取得、おめでとうございます！

菅野 智博 (*KANNO Tomohiro*) (国際学部国際社会学科・第12期生)さんが、2018(平成30)年3月20日(火)に一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻で、以下のように学位を取得されました。

学位名：博士(社会学)

学位番号：社第300号

学位授与機関：一橋大学

学位授与日：2018年3月20日

論文名：近代満洲における農業労働力と農村社会

なお、現職は日本学術振興会特別研究員・PDです。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)2名・博士(文学)(名古屋大学)/(筑波大学)/(東北大学)3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)1名・博士(人文学)(パリ東大学)1名・博士(芸術学)(筑波大学)1名・博士(社会学)(一橋大学)1名・博士(農学)(東京農工大学連合大学院)2名・博士(国際学)(宇都宮大学)14名・博士(経済学)(名古屋市立大学)1名・博士(観光経営学)(慶熙大学校)1名・博士(人間・環境学)(京都大学)1名・博士(学術)(杏林大学)/(筑波大学)/(東京大学)3名・博士(国際開発学)(名古屋大学)1名・博士(国際関係・紛争・平和学)(キングス・カレッジ・ロンドン)1名の計33名です。

◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

2018年4月9日(月曜日)午後3時から国際学部大会議室にて、2018年度オリエンテーションが開催されました。学長からの新入生へのメッセージは宇都宮大学HP(アドレスは以下参照)に、掲載されています。

([http:// http://www.utsunomiya-u.ac.jp/important/2018/04/006347.php](http://http://www.utsunomiya-u.ac.jp/important/2018/04/006347.php))

今年度の入学者は、国際社会研究専攻の第20期生 王 衛澤さん、王 爽さん、曹 倩倩さん、張 喬さん、鄭 斯琦さん、LAMA YUBRAJ さんの6名と国際文化研究専攻の第20期生 王 向苗さん、耿 蘭竺さん、TRAN VIET LINH さん、楊 漪さん、劉 志鑫さんの5名、そして、国際交流研究専攻の第15期生 韋 哲雄さん、于 雅楠さん、内田 詩乃さん、袁 臻さん、翁 惠玲さん、オルティス ベレスモロ レスリー ゆみこさん、黄 莹さん、江 強さん、項 馨磊さん、寿 琳莎さん、白田 直子さん、眞壁 希予さん、町田 星羅さん、

葉雲婷さん、RAHMAN SHEIK HABIBUR さん、劉琮さん、リュウ トウさん、芦 倩さんの 18 名で、計 29 名でした。

◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程国際学専攻に入学した AZALIA BINTI ZAHARUDDIN さん、**匂坂 宏枝**さん(国際文化研究専攻・第 10 期生)、**任 曉艷**さん(国際文化研究専攻・第 16 期生)、そして、**増山 貴子**さん(国際交流研究専攻・第 13 期生)進学おめでとうございます。今後の研究成果に期待したいと思います。(博士録 44 を参照)

◎ 着任教職員紹介その 23

藤井広重助教

国際学科所属の藤井先生が、昨年 10 月 1 日付で着任されました。

①氏名 (英文表記) : 藤井 広重 (*FUJII Hiroshige*)

②専門 : 国際関係法、国際人権・刑事法、平和構築論

③前職 : 内閣府国際平和協力本部 国際平和協力研究員、ケープタウン大学客員研究員 (国連大学 Global Leadership Training Program の一環として着任) など

④趣味 : 野球 (研究者には珍しく大学まで体育会の部活動で続けていました。初めての海外は、中学 3 年生の時に米国マイアミへ野球のトレーニングのために行った時です。)

⑤自己紹介 :

私は滋賀県長浜市の出身です。歴史はあるけれど国際的なこととはほぼ無縁ののんびりとした町で育った私が、国際学部で国際法を教えているなんて不思議な気がします。ですが、ちょっとしたきっかけで世界はとても近くに感じられるようになります。私の経験談は講義中にお話するとして、そんなちょっとしたきっかけを私と同じように地方で育ちながらグローバルな社会を見つめようとする学生の皆さんに提供できればとても嬉しく思います。特に、私が専門としているのは、アフリカを中心として紛争地における平和構築と法の役割についてであり、学術的なアプローチにとどまらず、現場で働く専門家も多く求められている分野です。私の南スーダンやマリといった様々な国での経験を共有しながら、より良い社会を構築する担い手を宇都宮から増やしていきたいです。また、栃木県は初めてお世話になる土地です。地域の方や宇大関係者の方々とも交流を深めることができばうれしいです。皆さま、どうぞよろしく願いいたします。

(2018 年 4 月 11 日原稿受理)

◎ 訃報

名誉教授の**小池清治**先生 (享年 76 歳) が 2018(平成 30)年 4 月 5 日にご逝去されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

◎ 受賞おめでとうございます！

とちぎユースサポーターズネットワーク代表理事の**岩井俊宗**さん(国際学部国際社会学科・第13期生)が、「第1回とちぎ次世代の力大賞 「文化・地域振興」部門 奨励賞」を受賞されました。

◎ 掲載記事紹介

1. 家庭教育誌「ないおん」第478号 1月号(平成30年1月1日発行)4面の「私の雑記帖」に、「アフリカの多様性とこれからの日本」と題して、**藤井広重**先生の記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊(平成30年3月8日発行)2面に、「偏見、格差、支援打ち切り・・・」と題して、「原発避難者の証言集加筆」「宇大教員ら増刷」の内容で、**清水奈名子**先生の記事が掲載されました。
3. 新潟日報 朝刊(平成30年3月11日発行)2面に、東日本大震災7年「支援や賠償 再考が必要」と題して、「現実の状況とマッチせず」の内容で**高橋若菜**先生の記事が掲載されました。
4. 蛍雪時代4月号の「研究トピックス」コーナーに、「自立をめぐる啓蒙思想家たちの永遠の問い」と題して、**田口卓臣**先生の記事が掲載されました。
5. 朝日新聞 朝刊(平成30年4月6日発行)第2 栃木・24面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田卷松雄①において「共に生きる社会考えたい」と題して、**田卷松雄**先生の記事が掲載されました。
6. 朝日新聞 朝刊(平成30年4月13日発行)第2 栃木・20面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田卷松雄②において「うそをつく 背景に思いを」と題して、**田卷松雄**先生の記事が掲載されました。
7. 朝日新聞 朝刊(平成30年4月20日発行)第2 栃木・24面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田卷松雄③において「夜間中学 学べぬ人の場に」と題して、**田卷松雄**先生の記事が掲載されました。
8. 朝日新聞 朝刊(平成30年4月27日発行)第2 栃木・24面に、とちぎの風「未来を拓く君へ」シリーズ 田卷松雄④において「ホームレスと「生の偶然性」」と題して、**田卷松雄**先生の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. UUnow 第45号(平成30年4月20日発行)2面に、「「宇大生は今！」**Special**「うちの学部のイトコロ」を語れ！」と題して、国際学部国際社会学科4年生 **葛原南美**さんの記事が掲載されました。
2. UUnow 第45号(平成30年4月20日発行)6-7面に、「特集2 国際キャリア教育プログラム」と題して、**重田康博**先生の記事および国際キャリア実習に参加した国際学部

2016年卒業の菊池麻莉奈さん、国際学部4年生 飛田拓実さん・兵藤花恵さん、国際学部3年生 尾崎文香さん、国際学部2年生 Hoang Anhさん・森島光太郎さんらの記事が掲載されました。

3. UUnow 第45号(平成30年4月20日発行)15面に、「本学国際学部4年小向加奈さんが「第15回日台文化交流青少年スカラシップ」大賞を受賞」と題して、国際学部4年生 小向加奈さんの記事が掲載されました。

○刊行案内

- 2017年3月に田巻松雄先生による新書が、下野新聞新書として「未来を拓くあなたへ『共に生きる社会』を考えるための10章」が刊行されました。
- 国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより3月下旬に、多文化公共圏センター年報第10号154頁が刊行されました。目次を以下に記します。(敬称略)

はじめに

田巻松雄

特集Ⅰ 新しい国際学部の一年目

(田口卓臣、田巻松雄、高橋若菜、高山道代、栗原俊輔、立花有希)

特集Ⅱ 十周年シンポジウム

公開シンポジウム「地域課題への挑戦」

—田中正造翁の谷中村における活動の現代における意義—

高際澄雄

外国人の子どもたちに更なる教育の機会を

—真の多文化共生のために—

宮島 喬

センター十年の一覧

I 投稿論文

「進みゆく震災風化と放置される避難者を見つめる

—栃木避難者母の会の活動(2015~2017)を手掛かりとして—

大山 香

「移民二世教育の『第三の道』への模索

—韓国ソウル市公立D小学校の『ハーモニー』教育事例から—

金 英花

「方法としての有島武郎

—『小さき者へ』をめぐる東アジア知識人の知的共鳴と思想的連帯—

丁 貴連

「高野山における多文化公共圏 —櫻池院の場合—

バーバラ・S・モリソン

II 活動報告

- 第9回グローバル教育セミナー「難民問題とグローバル教育Ⅱ」
- <シンポジウム>国際交流都市日光の再発見
- <宇都宮大学生国際連携シンポジウム2017>中東理解連続セミナー
- 益子プロジェクトの「マインドフルネスをしよう」
- 「福島原発震災に関する研究フォーラム」2017年度の活動報告

- 6 HANDS プロジェクト部門活動報告
- 7 ニュースレター『HANDS next』第 23 号
- 8 フェアトレードまつりチラシ

III 関連資料

- 1 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報発行要綱
- 2 新聞記事

◎ 第五回重田ゼミ研究会が 4 月 21 日（土曜日）午後 2 時 10 分から 4 時 40 分まで、UU プラザにて開催されました。福島県、神奈川県の遠方からの参加者や報告者の日本語学校時代の恩師を含めた 20 名の参加者がありました。報告者は以下の通りです。

1. **加藤 靖** (国際交流研究専攻 6 期生)
「海外における自然保護活動ー「パナマ共和国における野生ラン保護活動ー」
2. **茂榎 勉** (国際交流研究専攻 4 期生)
「NPO と寄付文化 DONORS DEVELOPMENT (寄付者開拓)ーロシアとアメリカの事例を参考としてー」
3. **Sudip DAHAL** (国際交流研究専攻 13 期生) 「Role of Community Based Organizations on Nepalese rural development from the view point of empowerment -From Case Study of Asapuri Mahadev Community Group in Sindhupalchok District」
4. **重田康博**先生 「カンボジアの市民社会スペースの実態と課題」

研究室訪問 49 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

旧教養部および国際学部で永らくタイ語関係の講座を担当された泉田スジンダ先生に寄稿をお願いしました。

特別寄稿

「退職のご挨拶」

泉田 スジンダ

สวัสดีค่ะ ดิฉันเป็นคนไทยชื่อสุจินดาค่ะ ยินดีที่ได้รู้จักค่ะ

(こんにちは、私はタイ人でスジンダといいます、よろしくおねがいします。)
このタイ語の文章はタイ語を受講学生にはなじみ深いものではないでしょうか。
私は今年の 3 月末で定年退職いたしました。1994 年に宇都宮大学教養学部（国際学部の

前身)で非常勤講師としてタイ語を担当して以来24年が過ぎました。その24年間、皆様からの暖かいサポートをいただいて何とか無事にやり遂げることが出来たように思います。感謝の気持ちでいっぱいです。長いようであつという間の24年間でした。

タイ語は毎学期週2・3コマを担当いたしました。学生がタイ語を履修する目的は様々です。冒頭の言葉の通り私のタイ語の講義ではまずタイ語で挨拶をします。「サワディカー」に続いて自己紹介をします。その時のタイ語と私の自己紹介を聞いてこの講義面白そうだと思ってくれた学生もいました。くるくると回すように書くタイの文字も全く未知のものでやってみる気になったという人もいました。将来国際協力の仕事をするのに役に立つと考えた人もいたでしょう。もちろん友人に誘われてちょっとだけ覗いてみようと思っただけで参加した人もいたと思います。ちょっとしたことがきっかけになってタイ語の講義に出席し、そのことで人生が大きく変わることもあるものです。実際、私の講義をとったことが契機となって現在タイ関係の仕事に就いて活躍している人も多く、不思議な出会いを感じます。

講義はワイワイガヤガヤと賑やかで、出身地の話や、こんなことがあったよ、ちょっと変わったものを見つけたよ、といった報告もあり、教える方も楽しい時間がありました。おしゃべりが楽しくて来る学生もいました。タイ語の講義に参加した学生はみんな個性的で、印象に残る人が多かったような気がします。不思議と欠席者が少なく、例年15・20人くらいの学生たちがタイ語をそれなりにマスターしていきました。中には、タイ人よりもきれいなタイの文字を書く人がいて驚いたものです。もちろん卒業したあとはタイ語とは無縁で発音など忘れた人もいますが、タイ語のクラスの雰囲気だけは心に残っていると思います。

宇大では講義以外でも様々なことにトライさせていただきました。学園祭では学生と一緒にタイ料理の模擬店を出しました。最初の頃は物珍しさもあってか長い列ができたこともあります。学祭の模擬店はボランティア活動の資金を捻出するためのものです。材料の買い出し、仕込み、当日の調理にてんてこ舞いだったのですが、それも楽しい思い出です。

学生と一緒に東北タイにでかけ現地の小学校を支援するボランティア活動(ナムチャイ)を行ったことも書いておかななくてはなりません。この活動は、参加した学生の皆さんが、国際交流・国際協力とは何か、現地の貧しい人をサポートするとはどういうことかを現場で真剣に考える機会となったと思っています。このボランティア活動は宇大の部活動として現在まで20年間続いていますが、今後とも出来る範囲で、ナムチャイの活動へのお手伝いを続けたいと思っています。

この2月に私の教え子でタイにいるOB・OGの皆さんが私の定年を祝ってバンコクで食事会を開いてくれました。そこに集まってくれたOB・OGの一人が「先生から教えてもらったことは私たちの誇りです、先生からはタイ語と同時にPassionを学びました」と言ってくれたのはとても嬉しかったです。そうですね、宇大の私のタイ語の授業中によく使っ

た言葉のひとつは **Passion** でした。私は **Passion** をもってタイ語を教えましたし、学生にも **Passion** をもって勉強に（ひいては人生にも）臨んでほしいと願っていました。

情報センター建物の隣にはバナナの木が植えられています。この木は国際学部が出来た当初からあったと思います。バナナは熱帯植物で、タイではそこら中にありますが、私は寒い宇都宮でバナナは大丈夫だろうかと見る度に心配しました。でも、毎年春になると新しい葉が出てきて、夏になるとたくさん葉がついて実をつけます。分かれた株からも新しい芽が出て大きくなっています。

学生の皆さん、卒業生の皆さん、このバナナの木のように、違った環境のもとでも頑張っ
て成長して下さい。

学生たちと過ごした宇大での 20 数年間は私にとって幸せでした。

ขอบคุณค่ะ

(2018 年 4 月 16 日原稿受理)

なお、国際学部同窓会HP「コミュニティ広場」に 2016 年の大学祭の写真を掲載していますので、併せてご覧ください。

博士録 44 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。

- ①氏名：**アザリア ビンティ ザハルディン** (*Azalia Binti ZAHARUDDIN*)
- ②出身大学院：UNIVERSITI SAINS MALAYSIA（修士課程）と宇都宮大学大学院 博士前期課程 国際学研究科（研究生）
- ③専門：応用言語学
- ④指導教官または所属研究室：佐々木一隆研究室
- ⑤趣味：読書と絵を描くこと
- ⑥研究テーマ：第二言語教室における母語使用の影響
- ⑦自己紹介：マレーシアのクアラルンプール出身のアザリアと申します。香川大学を卒業し、マレーシアの UNIVERSITI SAINS MALAYSIA で修士号を取得しました。今まで第二言語教室における母語使用の影響に関する研究をやってきましたが、特に日本語教育と英語教育に深く興味を持っています。私の研究が将来第二言語習得の分野に貢献することを目指しています。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 研究生)

(2018 年 4 月 19 日原稿受理)

- ①氏名：**匂坂 宏枝**(*SAGISAKA Hiroe*)
②出身大学院：宇都宮大学大学院 博士前期課程 国際学研究科 国際文化研究専攻
③専門：歴史学×環境学
④指導教官または所属研究室：高橋若菜研究室
⑤趣味：
⑥研究テーマ：公害・労災・職業病における「被害の不可視化」の条件に関する研究
一足尾銅山と久根鉾山の被害の比較から—
⑦自己紹介：
(国際学研究科 国際文化研究専攻 第10期修了生)

- ①氏名：**任 晓艳**(*REN Xiaoyan*)
②出身大学院：宇都宮大学大学院 博士前期課程 国際学研究科 国際文化研究専攻
③専門：日本語、日本文化研究
④指導教官または所属研究室：松金研究室
⑤趣味：日本の伝統文化
⑥研究テーマ：戦後日本のナショナリズムと工芸技術との関係性について一手漉き和紙技術の文化財指定を中心に—
⑦自己紹介：中国の北京から参りました。大学の時、1年間長崎外国語大学で留学したきっかけで、日本の伝統文化に関心を持つようになりました。そのため、博士前期課程のとき、宇都宮大学で和紙について研究してきました。どうぞよろしくお願ひ致します。
(国際学研究科 国際文化研究専攻 第16期修了生)

(2018年4月11日原稿受理)

- ①氏名：**増山 貴子**(*MASHIYAMA Takako*)
②出身大学院：宇都宮大学大学院 博士前期課程 国際学研究科 国際交流研究専攻
③専門：社会福祉、児童養護、人道支援
④指導教官または所属研究室：田巻研究室
⑤趣味：楽器演奏（ヴァイオリン）
⑥研究テーマ：児童養護の国際比較
⑦自己紹介：私は、2016年の4月に国際交流・国際貢献活動経験者として、本学大学院博士前期課程に入学いたしました。平日は、大学の事務員として勤務し、主に夜間・休日を研究の時間に充てています。博士前期で修士論文を仕上げる段階で、更に研究を深めたいと言う気持ちが強くなり、進学するに至りました。私は、児童養護を研究テーマとしておりますが、その原動力となったのがフィリピンでの人道支援活動にあります。
私は、仕事をする傍ら7年程前からフィリピンのNGOのメンバーとして、人道支援活動に携わって参りました。私の主な活動内容は、フィリピンの児童養護施設において、

入所している子どもたちを対象にアートセラピーを実施しております。仕事の都合上、子どもたちには1年に1度しか会えませんが、彼女たちの笑顔が私の研究への励みになっています。これからも、子どもたちの明るい未来のために研究を進めていきたいと考えております。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第13期修了生)

(2018年4月15日原稿受理)

知究人 32 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

「大学院での学び、そして研究について」

本多 はるの

私は2016年3月に国際学部国際文化学科を卒業し、同年4月に日本大学大学院芸術学研究科に入学しました。学部の3年生頃より美術史の世界に魅せられ、田口卓臣先生のゼミにて研究に没頭しました。出羽尚先生のご紹介により、日本大学大学院の美術史研究室のゼミ合宿に参加したことがきっかけで、進学を決意しました。

大学院では、フランス17世紀最大の画家ニコラ・プッサンの代表的な研究者である木村三郎先生のゼミに入り、美術史研究の基礎を徹底的に学びました。このゼミでは、専門的な外国語論文の講読や講義、発表なども行いますが、特徴的なのは、文献資料の扱い方や整理方法を身に着けることを何よりも重視する点にあります。研究のために集めた資料や文献を、情報カードやファイルボックスを使用してひとつひとつ丁寧に整理し、それらを論理的な順番で並べるという手順が基本です。これによって膨大に溜まっていく情報が体系的に整理され、同時に自分の頭の中もクリアになっていきます。資料の「整理の仕方」を学ぶことがこれほど大切だったのかと、大学院で初めて気付かされました。さまざまな理論や知識を吸収することよりも、そのための方法論を徹底的に身に着けるという教育法がとても新鮮で驚きました。それは結果的に、研究の質に直結するということを実感できたことが、何よりの学びだと思っています。

修士論文では、フランス新古典主義の最大の巨匠であるドミニク・アングル(1780-1867)の油彩画《オイディプスとスフィンクス》についての研究を行いました。肖像画や裸婦像が有名なアングルの油彩画の中でもまれで、最も完成された男性裸体像である本作について、先行研究ではオイディプスが示している特徴的なポーズについて繰り返し議論がされてきました。私の論文ではそのような研究史を辿り問題点を指摘した上で、これまでほとんど注目されてこなかったスフィンクスのモチーフに焦点を当てました。当時アングルが間違いなく触れた書物である、ドイツの美術史家ヴィンケルマンによる著作『古代美術史』の中のスフィンクスに関する記述と、アングルが本作品を描くために残したメモの記述が一致していることを新知見として提示しました。

現在は大学院を卒業し、新宿の四谷地区にある美術愛住館という美術館で学芸員として勤務しています。大学生活を通しての学びは本当に大きく、糧として今も生きていることを日々実感しています。恩師である田口卓臣先生と出羽尚先生に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

(国際学部 国際文化学科 第18期卒業生)

(2018年4月28日原稿受理)

海外だより 26 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「仰げば尊し、我が師の恩」

方 小 贇

知求会の皆様、ご無沙汰しております。2011年3月に博士後期課程を修了した第一期生で佐々木一隆研究室の方小贇です。このたび、知求会ニュースという貴重な場をお借りして、先生方や知求会の皆様にご挨拶を申し上げます。わたくしは現在中国の浙江财经大学・外国語学院で専任教師として日本語を教えています。

1974年に創立された浙江财经大学は「人間天国」と称される杭州に位置し、経済学、管理学、法学や言語学などの多学科を中心とする浙江省重点大学です。現在、浙江财经大学は16の学院、3つの研究院と1つの独立学院を有し、修士学位や博士学位の授与権を持ち、25,000人余りの学生が在籍しています。教職員は1,570人余り、そのうち博士号を持つ専任教師は590人余りです。浙江财经大学は世界各国の大学との間に国際的協力を推進することを重要視します。すでにアメリカ、イギリス、カナダ、日本など110を越える海外の大学や国際機関とパートナー関係を築きました。

そのうち、外国語学院は英語学科、日本語学科、商務英語学科、英語言語文学研究科、日本文化経済研究所、英語国家文学研究所、アイルランド研究所、翻訳研究所、外国言語学及び応用言語学研究所、コーパス言語研究所などを設けています。学生がしっかりとした基礎学力、強い実践能力を身に付けており、国家レベル、浙江省レベルの外国語学科コンテストにおいて300余りの賞を取得し、優れた成績を上げています。また、日本語学科は日本語専門知識と応用力、「日本語+ビジネス」といった複合型人才を育成することを目指しており、国際交流も積極的に推進してきました。東京経済大学、大谷大学など数多くの日本の教育機関と提携関係を持ち、教師全員は日本に留学した経験を持っています。

こういった活力溢れた職場に就職できたのはほかではない、恩師の故小池清治先生と佐々木一隆先生のお陰だとしみじみ感じています。両先生から、学業だけでなく、生活や精神面においても多大な援助をいただきました。小池先生には中華料理の「山泉楼」とフランス料理店、佐々木先生には東京の学会や紀伊国屋書店に連れて行っていただいたことを、今でも鮮明に記憶しております。また、中村真先生や吉田一彦先生、松金公正先生、丁貴連先生、松井貴子先生にもいろいろご支援をいただいたことに感謝を申し上げます。

先生方がご苦勞なさり丁寧な指導をくださったおかげで、今の私があると言えるでしょう。

就職後も、恩師の佐々木先生には仕事の悩みや研究発表などについて、いろいろご相談に乗っていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。先生が在学当時と同じように、研究や教育などについて熱心に手配や斡旋をしてくださいました。おかげ様で、ここ数年で論文を何本も発表することができました。修了生の私に対して、以前と変わらぬ姿勢で指導してくださり、関心を持ってくださいました。素晴らしい先生に恵まれたことで幸福感に溢れています。ちょうど一年前の2017年3月、先生にはるばる日本から杭州へお越しいただき、「比較の視点でみる日本語：アジアの諸言語や英語との相違点と共通点」というテーマで本学の教師や学生に素晴らしい講演を行ってくださいました。国際学部のミッション、国際学部・研究科の教育研究紹介、日本の学界の動向、言語研究による多文化共生への貢献など多方面にわたる充実した内容を在席者に伝授なさいました。講演終了後、学生たちが積極的に質問し、日本や宇大に対してすごく興味や関心を示しました。これは一つの小さな国際交流と言えるでしょう。6年ぶりの再会で昂ぶるものがありましたが、就職以来大きな研究成果が挙げられず、恩師には顔向けできないという複雑な思いもしていました。

宇大を修了し、結婚して今は二人の子宝に恵まれ、仕事に励んでいるごく普通の中年おばさんですが、13年前に宇大に入学した際には初々しい女子学生の一人でした。時間の流れ去るスピードを痛感しました。当時教えていただいた小池先生、岡田先生、梅木先生、伊藤先生、佐々木史郎先生、そして今年の3月に市川先生が定年退職になりました。本当にさびしく思います。皆様がどうか永らくお元気でいらっしやいますように。

本原稿を完成して知求会にお送りしようとしていた時に、恩師の小池清治先生が4月に亡くなられたとの訃報を受けました。・・・心よりご冥福をお祈りいたします。

(国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第1期修了生)

(2018年4月21日原稿受理)

海外留学今昔 22 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「スリランカ留学体験記」

沖館 由依

私は、大学3年次の約8か月間スリランカに交換留学をしていました。スリランカを留学先に選んだ理由は二つあります。一つは、興味があったコミュニティー開発の分野を実践的に学べると思ったからです。二つ目は、留学前にもスリランカを訪れたことがあり、北海道より小さい島国に様々な人種の人々が住み、また異なる宗教を信仰しているという多様性、自然の豊かさなどに魅力を感じ、留学を決めました。今でも毎日のように留学生

活中のことを思い出すほど、刺激的で楽しい経験をすることができました。

ペラデニヤ大学は、広大な敷地を持ち、様々な種類の鳥、サル、イノシシなどの野生動物もいて、自然に囲まれたところでした。私は、農学部で農業普及を専門とする学科に在籍していました。農学部ですが、農業について専門的に学ぶというよりも、農民に対する農業普及のための教育法やコミュニケーションの授業などを受けていました。それらの授業でも、時折農業の知識が必要な時は全くついていけなかったり、日本の農業について質問された時は、知識不足もあって上手く答えられなかったりして大変でしたが、課題などはクラスメートの助けもあり何とかこなしていました。授業は少人数だったこともあり、先生が一方向的に話す授業は少なく、発言の機会を与えてくれる先生が多かったです。またプレゼンテーションやグループ発表が多く、必然的に授業で話す機会を得ていました。英語能力も必須ですが、知識量や質問された時に素早く意見をまとめる力が必要であると実感しました。

日常生活は本当に経験したことがないことばかりでした。日本では便利な暮らしをしていますが、留学中は電気ケトル、スマートフォン、パソコンしかなかったもので、日本にいる時の生活とは全く異なりました。洗濯一つでも時間がかかり、不便だなと感じていたのですが、国際協力を学ぶ者としてそのような体験は現地の人々の生活を考える機会となりました。私は、半年間大学の寮に住み、二か月間はホームステイをしました。ホームステイでは、寮生活だけではわからないシンハラ人の家族の姿を見ることができました。ホストマザーが働いている小学校に行ったり、村の仏教行事に参加したりしたことが印象的です。

スリランカでは他の国と違って留学生が少ないので、現地の人と過ごすことが多く、よりスリランカについて知ることができ、価値観が大きく変わりました。留学後に新たに始めたことが二つあります。留学していて、現地の人と生活することでしかわからないことがあると思い、文化人類学に興味を持ち、勉強を始めました。また、日本の農業についてもっと知りたいと思い、農産直売所でアルバイトを始めました。留学は、新たなことを始めるスタートになりました。

ペラデニヤ大学への交換留学生が初めてだったこともあり、手続き等上手くいかないこともたくさんありました。その中で、留学生・国際交流課の方々、先生をはじめお世話になった方々に感謝申し上げます。今後も後輩たちがスリランカに留学してくれたら嬉しいです。

(国際学部 国際社会学科 第4年次在校生)

(2017年8月17日原稿受理)

「スリランカ留学体験記」

眞壁 希予

「スリランカってどこ？」—スリランカへの留学を報告すると大概周囲の反応はこのよ

うなものであった。一見馴染みが薄いように思える国であるが、紅茶の輸出量は世界一を誇り、「午後の紅茶」にも使用されていると言うと少しは親近感を持ってもらえるだろうか。旧国名であるセイロンの名がついたセイロンティーやセイロンブルーといったサファイアなどの宝石が豊富に存在し、インド洋に浮かぶ『光り輝く島（シンハラ語でスリランカの意味）』なのである。

私はこのような素敵な国に2016年6月から2017年1月までの7か月間、ペラデニヤ大学へ交換留学の機会をいただいた。途上国への関心から理論と実践の場を求め編入学をし、念願かなっての留学であった。しかし、私の留学生活は決して楽しいことばかりではなかった。協定が締結したばかりということもあり渡航の大幅遅延に始まり、渡航後に先方の学部長に挨拶に行ったところ「協定など聞いていない」と言われるところからのスタートであった。

それでもなぜか寮は用意されており、部屋の右隣はムスリム、左隣はシンハラ、と間に留学生の私たちが入居した。多民族国家であるスリランカは、大学という特殊な環境においては他民族間の交流はあるものの街中では過去の内戦の影響もありあまり見受けられない。自身とは民族の異なる他者への存在には慣れている彼らだが、見慣れない外国人に興味津々なようで、入居後、代わる代わる部屋に来てくれて言語を教えてくれたり、上手にカレーを手で食べるコツを伝授してくれた。寮内での毎日の水シャワーや度重なる停電、走り回る野良犬たち、サルが部屋に3度も入り食べ物を持っていかれたこともあったが、このような体験そのものも交換留学であったからこそ現地の学生と同様の生活が送れたのであった。

大学では農学部にも所属し、そこでは農村をはじめとした次世代のリーダーを育成するようなカリキュラムであったことから組織行動論やコミュニケーション論といった幅広い授業が開講され、農村へのフィールドワークといった実践的なものもあり非常に有意義であった。しかし、時間割表はあるものの予告なしに授業が休講、開講、ストライキが実施されることが多々あったのも事実だ。そのたびにいらだちを覚えていたが、スリランカ人のクラスメイト達と楽しいことばかりではなくそのような不満までをも共有することで笑い話に変わり、留学当初起きたような物事の順延がなぜ起きたのか少しばかり納得することもできた。

学校生活以外にも、本学の教授の研究対象であった紅茶のプランテーション農園に同行させていただけたことや青年海外協力隊の方々や現地のNGOに訪問、諸活動に参加させていただいたこと、そして日本語教師のボランティア活動などを通じてスリランカを多面的に捉える機会にも恵まれた。

このようにスリランカに温かく迎え入れていただき、帰国間際には「今度はいつ帰ってくるの？」と大学の友人のみならず、寮内の食堂を経営している一家やよく通っていたマーケットのおじちゃん達までもそう聞いてくれた。慣れない生活に不安を覚えることはあったがさみしさを感じたことは一度もなかった。

近年、外国人労働者の存在なくして日本の労働市場は成立しなくなりつつあり、コンビニや飲食店に赴くとそこで働く外国人を多く目にするようになり、スリランカも例外ではない。顔立ちやネームプレートをみてスリランカ人と思うと私はかつてスリランカで突然話しかけられたように今度は自分から話しかけてしまうようになった。彼らに私がスリランカで与えてもらった温かい眼差しを今度は少しでも私から向けられるように、と。今、私の生活は確実に留学生活の延長線上に位置する。これまで見過ごしてきた日常の何気ない、しかし大切な事に気付く。

今回、このように皆さんに留学経験をお伝えできる機会を頂戴し、スリランカに留学できたことを大変嬉しく思うのと同時に交換留学であったからこそ得られた人脈があること、そして後輩につながっていく喜びも感じる。

最後に、留学に際して多くの支援や助言をしてくださった本学関係者の皆様や先生方、家族、友人、並びに派遣先のペラデニヤ大学の関係者の皆様や他大学に属しながら様々な助言をくださったペラデニヤ大学留学経験者の先輩に感謝の意を表し、私の留学体験記とさせていただきます。

(国際学部 国際社会学科 第19期卒業生)

(2018年4月11日原稿受理)

学生サロン 14 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「Resource Network」

河崎 美里

みなさんは、Resource Network という団体を知っていますか？

こんにちは、私 Resource network の代表をしております、国際文化学科3年の河崎美里です。まず、今回は紹介する機会を与えてくださったこと、感謝いたします。それでは Resource Network (以下リソースネットワーク) がどのような団体なのかを紹介させていただきたいと思います。

私たちリソースネットワークは宇都宮大学国際協力団体のひとつとして活動している学生団体です。2006年に宇都宮大学学生が立ち上げ、その後親団体がいない学生だけの団体として、Resource(資源)を Network(ネットワーク)するという活動理念のもと、インドの子どもと女性の支援を行っています。主な活動としては、宇都宮を中心とする国際協力系のイベントにおいて、インド人女性の手作りクラフト(コースターやバックなど)を販売し、その売り上げた利益を寄宿舍に住む子どもたちに還元するという仕組みの協力活動です。また、年に一度、実際にインドに学生たちだけで行き、支援先の訪問を通して現地の実地のニーズ調査を行ったり、face to face のコミュニケーションを大事にして信頼関係をつくっています。

“支援”という言葉を使っていますが、私たちは現地の人たちと対等な立場にたち接しています。上から目線の支援にならないことを心がけ、対等な立場でのコミュニケーションを続けていくことで見えてくる新たな視点を大切にしています。私たちの軸の1つでもあるインド訪問では、いつも連絡をとってくれているシスター、雑貨をつくっているワーカーさんたち、寄宿舎に住んでいる子どもたち、そしてインドの大学に通っている学生たちなど、様々な人との交流をさせていただいております。インド訪問を通し、リソースネットワークが日本、インドの様々な人に支えられていることの再認識、そして私たちと楽しそうに遊んでくれる子どもたちの笑顔を守りたいという強い意志を持つことができているのです。私たちサークルのメンバーの中でもその意識を共有し、イベントなどに臨んでいます。

私たちの扱っているコースター1つでさえ、ワーカーさんの努力、シスターの想い、そして子どもたちの笑顔がつまっています。それを“伝えること”が私たちの最大の役目となるでしょう。コミュニケーションを通して、それらのことをたくさんの人に伝え、商品を作っている女性のこと、子どもたちのこと、インドのこと、そして私たちの事を知っていただけたらと思います。私たちもまだまだ発展途上ではありますが、これからも成長し続けたいと思います。

(国際学部 国際文化学科 第3年次在学学生)

(2018年1月20日原稿受理)

キャリア指南12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「在外公館，外務省で働くということ」

田巻 綾那

みなさんこんにちは。国際学部国際社会学科第13期卒業生の田巻綾那と申します。第44号知研究会ニュースでは東京大学大学院での院生生活について、第52号では「外務省在外公館派遣員制度」を利用して在ハンブルク総領事館で勤務していた時のことを書かせて頂きました。第52号での執筆の際、私は派遣員として働きつつ、任期終了後の進路を仕事か研究か決めかねている状況にありました。その後結果として仕事を選び、外務省で走り回る日々を過ごすことになったのですが、こういった経緯で仕事を選ぶに至ったかを記すことで、「こんな進路もあるんだ」という例をお見せできればと思います。

外務省在外公館派遣員制度は、国際社会で経験を積み友好親善に寄与してもらうという目的の下、原則2年(昔は3年でした)の任期で在外公館に人を派遣する制度で、主に語学力を生かした業務(公用出張者対応、語学を使った調整、翻訳・通訳等)に従事します。私は2014年3月から2017年7月までの赴任でしたが、その任期中は幸い?にも、G7エ

ルマウサミット（2015年6月）、G20ハンブルクサミット（2017年7月）、安倍総理や当時の岸田外務大臣の訪独といった機会に恵まれ、非常に貴重な経験をさせていただきました。その経験が私に「仕事」という進路を選ばせることになったのですが、その際に感じたのは、「外交の裏舞台で働く面白さ」でした。それまでは「●●で首脳会談がありました」といったニュースでしか知らなかった世界の、その土台を作り上げる面白さ。以前書かせて頂いたように、派遣員が外交に直接関わることはありませんが、その会談が行われる場所を確保したり、ホテルや車両、空港の調整をすることが非常に面白く感じられたのです。

上記を含む理由から私は本官採用試験を受け、外務省で働き始めました。現在所属しているのは「大臣官房儀典賓客室」という部署で、外国からの賓客接遇を主に行っています。派遣員時代に日本の公用出張者を受け入れていたのとは反対に、各国からのお客様を受け入れる部署に配属されることとなったわけですが、「外交の裏舞台で働く面白さ」は今も健在です。

世界は広い。人生は1度きり。そんなこと言われなくても当然だと思うかもしれませんが。でも外に出てみると、自分の思っている以上に世界は広いです。外に出ることで日本の知らなかった部分が見え、自分の考え方が180度変わることもあります。ついこの前まで学生だったような気がするのに、気付けばもう今年30歳ですし（笑）海外に興味がある、語学力を生かした仕事を体験してみたいという方にとって、派遣員制度は有益な制度の1つだと思います。外への1歩は踏み出すまでに勇気がいりますが、踏み出してみると思いがけない経験が待っていることもあります。興味があることにはぜひ積極的にチャレンジしてみてください。みなさんが後悔の少ない選択をしていけることを願っています！

（国際学部 国際社会学科 第13期卒業生）

（2018年4月20日原稿受理）

フォーラム 2018年の阜月を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦労しています。）

今回は寄稿予定者とメールのやり取りができず、未掲載になります。

●お願い—宇都宮大学3C基金への寄付に関して 再掲

4月に大学から「宇都宮大学3C基金」寄付への協力要請を受けています。詳細は以下のアドレスへアクセスしてください。http://www.utsunomiya-u.ac.jp/fund/3c_kikin.php
なお、海外からでも寄付ができる方法がありますので、よろしく願いいたします。

2017(平成29)年4月1日から2018(平成30)年1月31日までの寄付状況は以下の通りです。国際学部 7件・教育学部 130件・工学部 85件・農学部 380件・不明 7件の609件です。このデータが示すように、国際学部同窓会・国際学研究科同窓会からの同窓生

による関心が薄いように思われます。この機会に、ぜひご協力を重ねてお願いします。

New

東南アジア支部だより

第 63 号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん（国際学部社会学科第 1 期生・国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。第 4 号の主な内容は以下の通りです。1. 懇談会@バンコク 2. タイの昨今 連載コラム No.4 縁起担ぎ大国、タイランド 東南アジア地域在住の同窓生は積極的に声を掛け合っていただくことを祈念しています。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 24 号の内容は、1 イタリア半島 サンマリノ共和国神社建立 2 EU 支部だより –サンマリノ共和国–です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいため、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●今回、小池先生の訃報に接し大変残念な思いです。国際学部科目等履修生として、いくつかの授業を受けていました。緊張の中にも、新しい日本語の知見に触れたことは編集者にとって終生の財産となっています。国際学研究科の入学に際し、日本語学を選択するか、芸術学を選択するか、迷った末の入学だったことと記憶しています。改めて、ここからご冥福を祈ります。（合掌）

●2018 年 4 月 28 日（土）午後 2 時から、国際学部 A 棟 5 階の同窓会室にて、国際学部同窓会理事会が開催されました。岡山市から吉葉会長、東京から志村副会長・行澤副会長・福島市から丹治理事・田中理事・高野理事・会計担当の森さん、オブザーバーとして鮎沢さん（1 期生）と知求会から土屋会長が出席しました。来年度は国際学部同窓会設立 20 周年を迎えます。来年の 11 月中の大学祭にあわせて企画を構想しているようです。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@freeml.com